



実験で、光るタンパク質を作る遺伝子を扱う参加者。25日午後、松山市文京町の愛媛大

先端科学技術を体験

愛媛大 全国の高校生が合宿

先端科学技術の体験合宿プログラム「ウィンター・サイエンスキャンプDX」（科学技術振興機構主催）が25日、松山市文京町の愛媛大で始まり、全国の高校生ら24人が遺伝子組み換え実験などに取り組み組んだ。28日まで。キャンプは全国の大学や研究機関で2003年から毎年開催し、愛媛大では無細胞生命科学工学研究センターが実施。「DX」は通常より期間が長く、深い学びを得られる。センターの林秀則教授（植物生理化学）がタンパク質合成の医薬品への応用例や、タンパク質の性質などを解説。「非常に複雑だが、生命活動は化学反応の組み合わせで説明できる」と話した。

続いて参加者は、光るタンパク質を作るオワンクラゲの遺伝子と大腸菌に組み込み、光るタンパク質を作る大腸菌を生み出す実験に挑戦した。26日は、愛媛大で開発された「無細胞タンパク質合成法」で光るタンパク質を作り、実験結果を比較する。

埼玉県の淑徳与野高2年土井彩奈未さん（17）は「学校では扱わない機械もあり、実験できて楽しい。知らない単語も出てきたのでもう少し勉強したい」と熱心に取り組んでいた。（長谷川悠介）